

<資料> 卒論の、黙想の一部

黙想的取り組み

1. 物語と自身の経験

釈義したヤイロの娘の癒しと長血を患っていた女性の癒しの聖書箇所は、序で述べたように、私の長い信仰生活で体験してきた神の癒しの力、信仰に至れていない私の子供達にもおよぶ神の力について、聖書釈義を通して神の力、癒しの力を学ぶことから、わたくし自身の経験してきた事柄と聖書記事との関係性を黙想することを通して、より聖書の世界そして、神の思いをより深く理解できたら幸いなことだと思います。

身体から力が出ていく体験

私の体験として大きなことがある。肺がん末期の亡き妻の希望で以前、手当てで捻挫を直したことがあったのだからこの肺がんも直してほしいと懇願されたときのことである。東京女子医大に抗ガン治療のために入院していた妻のパジャマの上からその手当てのために胸に私の両手を当てた。すると、両腕の芯が、冷えるどころか冷たくなる感じで私の力が吸い取られるような思いに駆られ怖くなった。そのため、「ごめん、怖いからやめるよ！」と非常に冷たい、本能的な咄嗟の判断をくだしてしまったのである。この手当ての方法はお祈りするわけではなく、両手にソフトボールの球を抱くように何度か合わせて両手の間に暖かなものを感じたらその暖かなものを患部に押し当てるという手当てである。私はクリスチャンであるが、妻はノンクリスチャンで、本人も生存中に『イエスを信じられたら、信じたい』と、本人の大好きな三浦綾子さんの本を読んでいた。しかししばらくすると、腫瘍が脳に上がってしまい理解力が低下し、漢字も間違えて書くようになり、理性的に神様を信じることはできなくなり、病床洗礼へ導くこともできず、天に召された。

異教による癒しの実例

マコ 9:39 イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい」とあるように、イエスの力によらないでも、当時は、癒しの奇跡をおこなうことが出来ていたことを自分の体験でも理解できます。

現代でも他宗教においても癒しの奇跡は行われている。『アレタイア』 vol. 36 (2002 年) の江口論考にこのような記述がみられる

さて、その滝沢克己だが、彼は 1984 年に世を去るが、その数年前(一九七九年)突如、失明の危機に襲われた(「老人性黄斑部変性」)。目の前のすべてが歪み、やがて必ず失明に至る難病である。残された治療法はただ一つ、手術のみ。う

まくいけば幾分かは回復するかも知れない。彼は手術を決意した。ところが、ここからが不可思議なことだが、知人の勧めで滝沢は、近所にあった世間ではいわゆる新興宗教の一つとされている「晴明教」の道場にかよい、そこで手かざし（「浄霊の業」）を受けることとなるのである。そして、……彼の目は、手術を受けることなく、その手かざしによって八分通り直ったのである。実に怪し気なことではないか！晴明教とは、昭和のはじめ岡田茂吉がおこした「世界救世教」から、彼の死後、分かれた宗教教団であるが、手かざしによって病氣や障害を直す。¹

私はキリスト者であるので私の亡き妻への手当（癒し）の際に——聖霊を与えられて洗礼を受けているのであるとするならば——まさに、神が私の体を通して聖霊の力を注いでくれるかもしれない。

私自身がそのように理解して亡き妻の患部に手を当てていけば、妻の病は癒されていたと思われる。その後、難病を直すことのできると言われるキリスト者でなく気功で癒しをされているという方のところへ亡き妻を連れて行ったが、すでに抗がん剤を何種類か投与した後であり、その気功師の見立てでは気功の効果が出ないとのことであった。私の手当の方法は、宜保愛子が活躍していた頃に一度だけテレビ番組に出演していた人で、名前も覚えていないけれども、その人によるものである。当時、私自身、正座をした後に右ひざが痛くなって立ち上がれないことが何度かあったので、その人の方法に倣って自分自身で手当てをしたところ膝の痛みが治ったという経験があった。そのため、亡き妻の足首の捻挫の痛みも私が手当てしたのだと思っている。だが、その際には私から腕の芯を冷やすような力が出ていってはいなかった。私の力が抜けていく体験は、肺がんの手当のその時だけであった。

このことは、ブルームハルトによる癒しについての記述²において、「この男に対して、ブルームハルトが按手して罪の赦しを告げると、何かが身体から出てゆくように感じて、その病氣はいやされた。チュンデルはその様な例を数多く記している」とあるように、何かが体から出てゆくことを感じる体験はときにありうるということがわかる。ブルームハルトは牧師であり、当然洗礼と按手礼を受けているが、そのような人物にもこのような不可思議な経験を語ることがあるのである。

共同体との共有と語りかけ

長血を患う女性がイエス・キリストの衣に触れて、彼から癒しの力を受け取

¹ 江口再起「病氣にして同時に健康」『アレタイア』 No.38 (2002) : 5 頁。

² 井上良雄『神の国の証人 ブルームハルト父子』: 112 頁。

るということを、2022 年の現代においてどのように考えられるだろうか。イエス・キリストの衣、その衣に触れること、そして癒されることについて記してみたい。

人の内側から自然とキリストの香として醸し出されるのが霊性である

高橋保行が、『ハリストによって洗いを受けしものハリストを着たり³』、という聖使徒パウロの言葉どおりにキリストの体である教会の中に洗礼を受けて入り、キリストを身に着けたときに、神から賜物として与えられて、その人の内側から自然とキリストの香としてかもしだされるのが霊性である。

したがってキリストの体が自分の身に着けば着くほどに、霊性は神から人に与えられて、高まり深いものとなる。⁴と、述べているように、神から与えられる霊性によって福音を理解し愛の業を行う力を得ると共に、深められた霊性によって「キリストの香を醸し出す」ように「神の力」もまた醸し出されるのだと思われる。

イエス・キリストの身体は教会であるとも言う（エフェ 1:23、コロ 1:24）。また、「キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています」（ローマ 8:10）と聖書に記されているように、キリストは私たちキリスト者の中に内在しているとパウロによって言われている。

「衣」について

そのようなキリスト者の衣服について、相澤一が『イエス・キリストの「あなたがたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。」（マタ 5:40）という勧告は、このことを頭において理解されるべきであろう。衣服は、その着用者の全存在を代表するものであり、「全存在を投げ出す覚悟」がこの勧告の中には含蓄されているのである。』⁵と、記しているように、キリスト者の衣とはその人の全人格・全存在を現しており、衣を与えることは自分の全存在をも投げ出すこと、先に挙げた内なるキリストの醸し出す香りをも与えることと言える。

ローマの信徒への手紙 8:15-16 ではこのように言われる：

あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、子としてくださる霊を受けたのです。この霊によって私たちは、「アッバ、父よ」（マルコ 14:36）

³ ガラテヤ書 3 章 27 節

⁴ 高橋保行「霊性の高まりと深さ」、『アレティア』No. 10：21 頁。

⁵ 相澤一「神の民の装い」、『アレティア』No. 40：17 頁。

と呼ぶのです。この霊こそが、私たちが神の子どもであることを、私たちの霊と一緒に証ししてください。

私たちキリスト者は神の子とされる霊をも衣類を通して賜っている。であればこそ、癒しを求める・苦しんでいる隣人に対して私たちがキリストに倣って身を投げ出す覚悟がなくてはならない。

ブルームハルトによる癒しについて

1840年代のドイツにおける歴史的背景の中でブルームハルトによって記された『神の国の証人ブルームハルト父子』では癒しについてこのような言及が見られる：

彼が罪に苦しんでいる人々に勧めることは、「誠実に自分のことを考えてくれる友人に、神の現臨のもとで、祈りつつ、自分自身を打ち開く」こと以外ではなかった。彼にとっては、ヤコブ書5章16節の「この故に、互いに罪を言い表わ」せという勧めの言葉の通りに、一人一人の罪の告白が重要なことであつた。

6

トゥルナイゼンによると、悪霊を追い出し病を癒す牧師であるブルームハルトの祈りについて、『日曜日の礼拝において、時には「主の祈り」の最初の三つの願いだけしか唱えなかった。（というのは）それが彼の祈りを特徴付けている（からである）。それは徹頭徹尾、三つの「御国・・・、御名・・・、御ところ」という最初の願いに向けられていた。この場合、物乞いがなされたのではなかった。この場合は、神が真剣に求められ、神が讃美され、称賛された。ひと言でいえば、祈られるたびごとに、神があがめられたのであつた。⁷

父親の祈りについて、子ブルームハルトは、かつて述べている。「彼は祈りを病気の治療に引き下げる思想には反対であつた。」⁸

『彼は人間的な切望からの、あの熱烈な、切なる祈りを戒め、「先ず神の国を求めよ。そうすれば、その他のものは見出されるであろう」という御言葉を、「あなた方の父は、あなた方が祈り求める前に、あなたの必要なものを知っていたもう」という、み言葉を厳格にまもった。』⁹

井上義雄によると、『彼が訪れてくる病人たちに対してしたことは、その人の

⁶ 井上良雄『神の国の証人 ブルームハルト父子』：105頁14～17行。

⁷ トゥルナイゼン『トゥルナイゼン著作集 第6巻』：212頁7～12行

⁸ 同上 212頁14行～18行

⁹ 同上 213頁 1行～4行

ためのとりなしの祈りと、きわめて短い牧会的な対話であった。しかも、最も重要なことは教会の礼拝に出席させることで、個人的対話には二次的な重要性しか、認めていなかった。按手をすることもあったが、それは極めて例外的な場合に限られた。』¹⁰

キリスト教でない人に改心を進めず、悔い改めも求めず、礼拝に出ていただくことで、その方が癒されていくとの記載がある。また、礼拝説教で病の癒しを語ることはなかったとのことであった。

井上義雄¹¹によると、カール・バルトは「十九世紀のプロテスタント神学」¹²のなかでブルームハルトについて述べている。『ブルームハルトは天地を動かすこの闘争への人間の参与について、¹³・・・人間に要求する神であったということである。¹⁴・・・それは、人間をご自身にとって、信仰にとって、神を求める叫びと呼びかけ、当然のものとして要求する神である。¹⁵』

『根本的に重要だったのは、全体的人間であり、身体と魂の癒しであった。そこで彼の活動においては、罪の赦しと病気の癒しがいつも相並んで進められた。¹⁶』

『彼にとって罪の咎の為に、滅びの苦境がどうしてもよいことにならない以上。イエスの名があちこちで解決の言葉を意味している以上、ブルームハルトはその限りでは西方的ではなく、東方キリスト教的に考えている。¹⁷』

『ブルームハルトについて書くバルトは、魂と身体についてのギリシャ的・古代教会的な抽象的な二元論でもなく唯物論や唯心論の抽象的一元論でもない聖書的な「具体的一元論」が、ブルームハルトにおいて実現されているのを見ているのは確かだと思われる。¹⁸』と井上義雄は述べている。

礼拝出席後の腰痛の回復の経験

礼拝へ出ることで癒されていくことに関して、私自らに思い当たることがある。既にキリスト者ではあったが、介護支援事業所を立ち上げて 3 年目ほどとなった 2003 年頃、持病の腰痛が十数年ぶりに悪化して、歩くにも背筋を伸ばさ

¹⁰井上良雄『神の国の証人 ブルームハルト父子』：125 頁。

¹¹ 井上良雄『神の国の証人 ブルームハルト父子』：129 頁。

¹² 『カール・バルト著作集 13 十九世紀のプロテスタント神学下第二部 歴史』

¹³ 同上 p 348 下段 14 行～

¹⁴ 同上 p 349 上段 10 行～

¹⁵ 同上 p 349 上段 13 行～

¹⁶ 同上 p 349 下段 2 行～

¹⁷ 同上 p 349 下段 11 行～

¹⁸井上良雄『神の国の証人 ブルームハルト父子』：129 頁。15～17 行

ないと痛みが走り、階段の昇り降りは手すりを伝っても痛みが走っていた。土曜日は病院にも行けず一日横になって休んでいたが、日曜日の朝「昨日一日寝ていても変わりなかったし、朝のCSの礼拝は一階（旧会堂）なので、痛みもひどくないしCSの礼拝だけ出て帰ろう」と思ったが、せっかく教会に来たのだから大人の礼拝にも出て行こうと階段を上ると、それまでの痛みがいくらか軽減されていた。そして定席の3階まで手すりを伝って登りきった。一番後ろで礼拝に出席し、讃美歌を歌い、説教を聴き、共に主の祈りを唱えた。礼拝が終わり、階下に階段の手すりを伝って下りてみると、腰に響く痛みは消失し、ひきつるような軽い痛みにまで回復していたのであった。

その後、当初はすぐに帰宅しようと思っていたが腰痛が改善してきたので、CSの教師会に参加し読書会を通してみ言葉を学び合った。CS教師会が終わって教会を出るときには痛みはほとんどなくなっており、階段のある近道のルートを下り、坂を上って帰宅した。あくる日には腰痛は治っていた。本論文および黙想を記すに際し、この記憶が脳裏によみがえった。